

自己肯定感の定義

松井 大樹

< 2つの自己肯定感 >

・競争的自己肯定感…競争に勝ち、他人より優れていることで満たされる自己肯定感。
競争に負け、他人より劣っていることにより容易に自己否定感になりうる。

・共感的自己肯定感…自己のかけがえのなさ、かけがえのない人生を生きていることに基づく自己肯定感であり、そのかけがえのなさに共感しあえる自己肯定感。

→この2つの違いに着目すると日本の子どもの自己肯定感が低い理由が見えてくる。

○そもそもアメリカや西洋の「自己」と日本の「自己」の捉え方が違う？

西欧の自己は相互に独立していて、それぞれの持っている内的な属性が重視され、能力などの属性を高めていくことにウエイトをかけるのに対し、日本では他者との関係のなかで生きる自己にウエイトがかかる。そういった違いをもった自己というものを肯定するので、その肯定の仕方や性格も違ってきてしまう。

西欧→「どうだ、俺はこういうことができる。ああいうこともできる！」

日本→「私は周囲を信頼している。ありのままを受け容れてもらっている！」

○自分をほめる西欧人と自分をほめない日本人？

西欧人は「自分には能力がある」ということを確認し、アピールするようなことをよくして自分やお互いをほめるのに対し、日本人はあまり自分をほめたりしない。むしろ「私はこちらところが至りません」と自分を批判的に表現する。これは他者との協調的な関係を重視する日本人にとっていわば「伝統」として根付いている。だが、受験などの競争原理が浸透するにつれて協調的な思いやりのある人間関係が希薄になり、今の日本の子どもの自己肯定感が低いことにつながっていると考えられる。また、多くの統計が西欧的な自己肯定感に着目していることも考えなくてはならない。

(参考文献：『生きることと自己肯定感』『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』)

< 自己肯定感の定義 >

今後の研究において、私が高めていきたい子どもの自己肯定感は

温かみのある人間関係において「自分が自分であっていい」と思える気持ち
と定義し、授業の中でどのようにそれを高めていくか研究していきたい。